社会教育課 9

文化財保護課

中島遺跡発掘調査概報

昭和55年度

前橋市教育委員会

序

近年市民のスポーツに対する関心はますます強く、自ら運動を楽しむ人々も年々増しており、それに伴う施設の拡充を望む声も強いものがあります。清里方面運動場も、これら要望にこたえて計画された施設の一つであります。

今回の調査は、運動場敷地の一部が遺跡地にかかり、それが削平のおそれもあるため、運動場建設に先立って実施したものであります。

発掘調査の結果は本文に記載したとおり、87戸の竪穴住居をはじめとする遺構が発見され、多くの成果を収めることができました。

本書が市民各位及び学術研究の分野において、多少なりとも貢献することを念願いたしますとともに、調査に際してよせられました多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表する次第であります。

昭和56年3月30日

前橋市教育委員会
教育長　金　井　博　之

昭和55年度

目　次

I．遺跡の位置と環境…… 1
II．発掘調査の概要
　1．発掘調査の方法…… 2
　2．地層…… 2
　3．遺構
　　(1)．概要…… 2
　　(2)．竪穴住居跡…… 2
　　(3)．ピット…… 5
　　(4)．溝状遺構…… 5
　　(5)．井戸跡…… 5
　　(6)．集石遺構…… 6
　4．遺物
　　(1)．概要…… 6
　　(2)．竪穴住居跡…… 6
　　(3)．ピット…… 6
　　(4)．溝状遺構……11
　　(5)．その他の遺物　…11
　5．結語……11
附　清里南部遺跡群IIの遺物

例　言

1．本書は、前橋市清里方面運動場造成に伴い事前発掘調査した、中島遺跡の発掘調査概報である。

2．遺跡の所在地は下記のとおりで、調査面積は1.23haである。

　前橋市青梨子町字中島 560番地他。
　前橋市青梨子町字中原 927－3番地他。

3．発掘調査は前橋市教育委員会が実施し、担当は下記の者（社会教育課文化財保護係）が当った。期間は昭和55年11月11日～昭和56年2月28日である。

松本　浩一	川崎　始
福田　紀雄	田口　正美
唐沢　保之	杉浦つや子

4．本書の編集・執筆は唐沢保之が当った。ここにいたるまでの遺物整理・実測・製図・写真等には、多くの作業員・整理員の協力があった。

5．地層及び基盤層等の鑑定は、群馬大学教授新井房夫氏にお願いした。

6．本調査における出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。

Ⅰ．遺跡の位置と環境

本遺跡は、榛名山の東南麓が利根川に切断される手前約３㎞付近に位置している。この付近の地形は、北西から南東にかけてゆるやかに傾斜しており、その方向を流れる多くの小河川によって細長い台地状の地形がつくられている。本遺跡地は北の午王頭川と南の八幡川にはさまれた台地の一部に所在し、八幡川に面して立地している。これをもう少し微視的にみると、遺跡地の北に、八幡川の崖と100～200ｍの間隔をおいて帯状の低地がある。本遺跡の北はこの低地で区画され、南は八幡川で区切られている。遺跡地付近の標高は海抜 152ｍ前後、八幡川及び帯状低地との比高さは、それぞれ 4.5ｍ、 1.5ｍ前後である。

本遺跡の周囲には、総社古墳群・山王廃寺跡・国分寺跡・推定国府跡等が存在し注目される。前橋市教育委員会では、昭和54年から土地改良事業に伴う発掘調査を近接地域で実施しており、奈良・平安時代の竪穴住居跡を中心に多数の遺構が検出されている。本遺跡も遺物の散布状態等から同様な遺跡地とみられていた所である。

古代	1．王山古墳　2．高塚古墳　3．金古愛宕塚古墳　4．総社二子山古墳　5．総社愛宕山古墳　6．宝塔山古墳　7．蛇穴山古墳　8．南下Ａ号古墳　9．南下Ｂ号古墳　10．南下Ｅ号古墳　11．山王廃寺跡　12．国分寺跡　13．(推定)国府跡　14．総社神社　15．陣場遺跡
中世	13．新海城跡　16．石倉砦跡　17．大友館跡　18．村山城跡　19．檢田城跡　20．勝山城跡　21．宵梨子の砦跡　22．(伝)東覚寺跡
近世	23．総社城跡

▨部分は昭和54・55年度、前橋市教育委員会の調査地点(本書Ｐ.11参照)

II．発掘調査の概要

1．発掘調査の方法

運動場の造成面積は 2.6haの計画であり、発掘調査は、そのうちの掘削工事の予定される約1.23haに対して実施したものである。対象地全面に、表土（耕作土）はブルトーザーで排土し、以下遺構確認面まではユンボーで掘り下げを行なった。遺構の確認しだい随時手掘りの調査に切り変えた。遺構平面図の一部と遺跡全体図は測量会社に委託した。

2．地　層

本遺跡地の標準層位は次のようであった。

Ⅰ層　表土（耕作土）。砂質性黒かっ色土。10～20cm。

Ⅱ層　B軽石を主体とする砂質性黒かっ色土。場所により灰状の青灰色ブロックを混ぜる。部分的に認められる。5cm前後。

Ⅲ層　C軽石と二ッ岳系の軽石を混ぜる黒かっ色土。若干の焼土粒と炭化物を含み、やや粘質を帯びる。20cm前後。

Ⅳ層　F・Aを含むややかっ色味の強い黒かっ色土。部分的に認められる。5cm前後。

Ⅴ層　多量のC軽石を含む黒かっ色土。黒色味は強い。5～10cm。遺跡地の北半にはない。

Ⅵ層　軽石を含まない粘質黒かっ色土。黒色味は強い。20cm前後。

Ⅶ層　茶かっ色味を帯びた粘質黒かっ色土。

Ⅷ層　粘質暗灰色土。

Ⅱ層とⅣ層は遺跡地南端の一部だけにあり、他では見受けられなかった。Ⅴ層も南部にのみ認められた。遺構確認面は、すべての遺構が、南部ではⅤ層上面のものもあるが、大半がⅥ層上面であった。遺構と覆土との関係は下表のとおりである。

覆　土	遺　　構
Ⅰ　層	溝状遺構6、集石遺構
Ⅱ　層	ピット3～11、溝状遺構1、井戸跡
Ⅲ層またはⅢ層類似層	竪穴住居跡、ピット1・2・(12)・13～15、溝状遺構2～5

3．遺　構

(1). 概　要

1.23haの調査の結果、竪穴住居跡87・ピット15・溝状遺構6・井戸1・集石遺構1の合計 110の遺構が検出された。時代は地層及び遺物相からみて、奈良・平安時代～近世以降にわたるものとみられる。

(2). 竪穴住居跡

竪穴住居跡は87戸を検出した。そのうち69戸に重複が認められ、多いものでは10～15戸の所が2ヶ所あった。このような傾向は、特に調査区域の南半部に目立った。北半部では、多くても3～4戸の重複で概して少く、これらが北西の谷状の底地に向かって、直径50m前後で半円状に分布していた。これらの竪穴住居跡は、土師・須恵器または灰釉陶器を伴っていた。

個々の概要は第1表のとおりである。

第1表　竪穴住居跡遺構一覧表

No.	形状 壁走向	規模(m) (東西×南北) 壁高(cm)	床面積 (m²)	かまど 位置	かまど つくり 巾(cm)	内部施設等 (数字の単位はcm)	重複関係
1	方形 N 3° W(東)	3.00×2.80 12	8.40	東壁南寄	袖石・支石 40前後	南東隅に円型貯蔵穴。55×45、深さ32。支石は凝灰質砂岩の加工石、敷頭円錐形。	
2	長方形 N 4° W(西)	3.62×3.13 15	11.29	東壁南端	50		
3	長方形 N 4° W(西)	2.77×3.67 21	10.17	東壁南寄	袖石、壁石 45	南東隅に長円型貯蔵穴。94×56、深さ35。カマド付近に多量の石塊。カマド内壁使用石か。	
4	長方形 N14° W(東)	2.20×3.20 10	7.04	東壁南寄	袖石、架構石 45前後	南東隅に円型貯蔵穴。25×20、深さ30。袖石、架構材は凝灰質砂岩。架構材（焚口冠石）長58。	
5	長方形 N93° E(南)	4.0 ×4.20 18	16.80	東壁南寄	袖石 55	東壁南端に東に巾60×長さ100の張り出し。カマド再築（最初のカマドの北半を壊わして再築。）袖石は凝灰質砂岩。	19→5
6	長方形 N11° W(西)	2.30×2.90 5	6.67	東壁中央	袖石 20	袖石は凝灰質砂岩。	
7	長方形 N11° (西)	1.90×3.60 15	6.84	東壁中央	袖石 45		
8	長方形 N 4° W(西)	3.40×3.95 22	13.43	東壁南寄	75前後		12→8
9	長方形 N 3° W(西)	3.00×3.50 34	10.50	東壁南端	袖石、架構石 50	カマド手前と南西隅付近に円型ピット。前者50×48、深さ32。後者67×60、深さ14。架構石(冠材)、凝灰質砂岩切石。長さ60。	
10	長方形 N 8° E(東)	2.87×5.05 15	14.49	東壁南寄	70前後		11→10
11	長方形 N 3° W(東)	3.50×3.80 20	13.30	東壁南寄	95	南壁はH－10に破壊されている。カマドは東壁南端に近い。	12→10
12	長方形？ N 5° W(西)	3.25×1.90～ 17	6.18～	東壁南寄	45	北半分をH－8に、南壁を溝状1に破壊されている。	13→8 →溝状1
13	長方形 N 3° W(西)	3.70×5.90 30	23.36	東壁南寄	60～	カマドと南東隅の中間に貯蔵穴状の円型ピット。67×63、深さ13。西壁南端に西に巾190×長100の張り出し。壁下に周溝。	13→溝状2
14	不整方形 N 5° E(西)	4.30×4.50 25	18.00	東壁南寄	袖石、架構石 支石、　47	カマドと北東隅の中間に円型ピット。45×45、深さ28。袖石、支石に安山岩山石。架構石（冠材）に凝灰質砂岩。	
15	長方形 N97° E(北)	3.70×2.50 16	9.25	東壁南端	袖石 40前後	袖石は凝灰質砂岩。	
16	方形 N 1° W(東)	2.80×2.85 20	7.98	東壁南寄	袖石、壁石、 架構石、　45	南東隅に不整円型の貯蔵穴。100×96、深さ35。北壁中央東寄りに巾 113×長67の張り出し。壁石と架構石に凝灰質砂岩。	18→16
17	長方形 N 7° E(東)	2.75×2.90～ 14	7.98～	東壁南寄	40	南東隅に貯蔵穴状の浅い不整円型ピット。106×95、深さ10。北壁付近はH－18により破壊。	17→18
18	方形 N 2° E(西)	3.70×3.65 19	13.51	東壁南寄	? ?	東半分及びカマドはH－16により破壊。カマド推定地付近に焼土、灰、安山岩山石。南東隅に貯蔵穴状の円型ピット。52×67、深さ17。	17→18→16
19	長方形 N 8° W(西)	2.64×3.43 50	9.03	東壁南寄	90前後	南東隅に方型の貯蔵穴。85×85、深さ19。カマド先端を東壁にそろえ、住居内に構築。壁下に周溝。	19→5
20	長方形？ N 1° E(西)	0.9～×2.0～ 10	1.80～	東壁	75前後	カマドと住居の一部を残し、大部分をH－22により破壊。	20→22
21	長方形 N 5° W(東)	2.95×3.75～ 20	11.06～	東壁南寄	68		21→22
22	長方形 N 3° E(東)	3.95×4.88 20	18.61	東壁南寄	68	南東隅に円型の貯蔵穴。70×55、深さ30。	20→22 21→22
23	長方形 N 7° E(西)	2.60×3.45 27	8.97	東壁南寄	82	南東隅に長円型の貯蔵穴。85×75、深さ18。住居構築前のピット（140×85、深さ12）を埋め、貼床。	23→25 23→24
24	長方形 N 2° E(西)	2.20×2.80 18	6.44	東壁南寄	65	カマド前から南壁にかけて焼けた凝灰質砂岩の切石散布。カマドは東壁南端にやや近い。	23→24
25	長方形 N 1° W(西)	2.82×3.80 27	10.15	東壁南寄	55	カマド内に凝灰質砂岩。南東隅に円型の貯蔵穴。40×33、深さ32。	23→25
26	長方形 N31° W(東)	3.84×5.50 27	21.12	東壁南寄	袖石？、壁石 45前後	カマド壁石に凝灰質砂岩切石。焚口部左右に袖石を抜いた痕跡。南東隅に不整方型の貯蔵穴。44×35、深さ33。壁下に周溝。	49→23→27
27	不整方形 N 2° E(西)	3.0 ×3.97 22	11.91	東壁南寄	? ?	カマドはH－46により破壊。灰の堆積と周辺に安山岩、凝灰質砂岩。形状は推定。	26→22→46
28	長方形 N　(東)	2.50×3.50 21	8.75	東壁南端	82	北壁不明。規模、床面積は推定。	46→28 29→28
29	長方形 N88° E(北)	2.00×3.30 20	6.60	東壁北寄	壁石 50	カマド壁石は凝灰質砂岩。南東隅に三角状の張り出し（掘りすぎ？）。	28→28 28→30
30	長方形 N 2° W(西)	3.70×5.10 35	18.87	東壁南寄	60	南東隅に不整型の貯蔵穴。110×90、深さ21。カマドは地山を掘り残し袖とする。壁下に周溝。床に石の埋め込み。	29→30→31 →47
31	長方形 N 1° W(西)	2.40×3.00～ 28	7.20～ 9.60	東壁	袖石？ 50	重複が激しく、南壁不明。	30→31 37→31
32	長方形 N86° E(南)	3.50×4.00 15	14.00	東壁南寄	60前後	西壁は検出面からの掘り込みが浅く不明。規模、床面積は推定。	32→溝状1
33	長方形 N　(西)	4.40×5.90 15	24.19	東壁南寄	袖石、架構材、 支石、　37	カマドに使用の石はすべて凝灰質砂岩切石。カマドは東壁南端に近い。	

No.	形状・走方向	規模(m)(東西×南北)深さ(cm)	床面積(㎡)	かまど 位置	かまど つくり巾(cm)	内部施設等(数字の単位はcm)	重複関係
34	長方形? ?	? 5	?	東壁	65	カマドと、その前の床面のみ残存。	34→35
35	長方形? N3°W(東)	3.10×2.60 15	8.06	東壁北寄	63	カマド内に凝灰質砂岩。規模・床面積は推定。カマドは東壁北端に近い。	34→38
36	長方形 N7°E(東)	2.70×3.50 16	9.45	東壁南寄	抜石	東南隅に長円型の貯蔵穴。95×55、深さ14。カマド前から貯蔵穴付近にかけて石塊散乱(凝灰質砂岩を含む)。	38→39
37	長方形 N7°E(東)	2.20×2.50 12	5.50	東壁南寄	45	北東隅と南西隅に円型ピット。前者32×31、深さ不明。後者43×35、深さ23。カマドは東壁南端に近い。	不明
38	長方形 N10°E(西)	2.20×2.60 12	5.72	東壁 ?	? ?	東壁をH−36により破壊。住居中央に長円型のピット。210×130、深さ10。	38→36
39	長方形 N98°E(南)	3.40×4.70 25	15.98	東壁南寄	粘土 90	カマド前の右端の散乱。壁下に周溝。東壁にカマド左袖に接して段状の施設。長さ 110×巾25。カマドは東壁南端に近い。	40・41・44→39
40	長方形? N97°E(北)	1.00〜×4.30 25	4.30〜	?	? ?	住居の大部分をH−39により破壊。南西隅に長円型のピット。113×70、深さ不明。壁下に周溝。	43→40→39
41	長方形 N (西)	2.90×3.70 25	10.73	東壁南寄	抜石、壁石 30	カマド付近に石塊散乱。カマドは東壁南端にやや近い。	41→39
42	長方形 N2°E(西)	2.50×3.65 15	9.13	東壁南寄	抜石、支石 30	南西隅に円型ピット。59×55、深さ36。壁下に周溝。カマド付近に凝灰質砂岩も散乱。	43→42
43	長方形 N9°E(東)	3.70×4.55 30	16.84	東壁南寄?	? ?	H−40により東壁南半破壊。東壁北東隅寄りに円型ピット。64×52、深さ21。壁下に周溝。	44・45→43→40・42
44	長方形? N3°E(東)	2.10〜×2.00〜 15	4.20〜	?	? ?	南半と西半が、H−39・43により破壊。床の広範囲に灰と凝灰質砂岩切石の散乱。	44→43→39
45	長方形? N96°E(北)	2.50〜×0.50〜 35	1.25〜	?	? ?	大部分をH−43により破壊。	45→43
46	長方形 N87°E(北)	4.10×3.60 20	14.76	東壁南寄	? ?	住居の南半はH−28により破壊。カマド跡周辺に安山岩。住居跡北部に円型ピット。75×65、深さ20。	27→46→28
47	長方形? N2°W(東)	1.00〜×2.00〜 20	2.00〜	東壁南寄	抜石、壁石 架構材、 57	カマド壁石に凝灰質砂岩と安山岩山石を混用。架構材は凝灰質砂岩切石。カマドは東壁南端に近い。	30 49・50→48
48	長方形? N 前後	0.50〜×1.30〜 30	0.65〜	?	? ?	北東隅のみ残存。他はH−26等により破壊。	(48→26)
49	長方形? N 前後	1.10〜×1.20〜 30	1.32〜	?	? ?	南東隅に長円型の貯蔵穴。90×15、深さ16。南東隅のみ確認。	49・50→47
50	長方形? N1°W(西)	? ×2.50 ?	?	?	? ?	南壁のみ確認。範囲・床面等不明。	49・50→47
51	不整方形 N2°E(東)	3.40×3.90 20	13.20	東壁中央	40		
52	長方形 N3°W(東)	2.80×3.60 15	10.08	東壁南寄	抜石 50前後		
53	長方形 N1°E(西)	2.70×3.25 15	8.78	東壁南寄	60	南西隅に円型ピット。60×47、深さ30。カマド内に凝灰質砂岩、安山岩転石。カマドは東壁南端にやや近い。	
54	? ?	約3.50×約4.50 10	15.75 前後	東側か	? ?	形、範囲等は不明。東側部分をH−55により破壊。住居内に凝灰質砂岩散乱。	54→55
55	長方形 N38°E(西)	2.25×2.90, 20	6.53	東壁南寄	約60	カマド左袖部分と南西隅に長円型ピット。前者35×30、深さ42。後者70×45、深さ25。カマドを中心に凝灰質砂岩を含む石塊散乱。	54→55
56	長方形 N4°E(西)	2.40×2.50〜 20	6.00〜	東壁南寄	抜石 50	南壁に巾95×長50の張り出し。抜石は凝灰質砂岩。カマド前付近に凝灰質砂岩等の散乱。	56→58
57	長方形 N1°W(西)	1.30〜×3.70 35	4.81〜	?	? ?	西壁付近を残し、大部分をH−59により破壊。	58→59
58	不整方形 N5°E(東)	2.00×3.67 15	6.60	東壁中央	60前後		59 56→58
59	長方形 N93°E(南)	5.10×4.40 30	22.44	東壁南寄	約50	住居内に焼けた凝灰質砂岩散乱。	57→59→58
60	方形 N5°W(東)	2.60×2.75 18	7.15	東壁南寄	約40	南壁東端に巾80×長80の張り出し。中央北寄りに不整型ピット。55×36、深さ20。カマドは東壁南端に近い。	60→61
61	長方形 N10°W(西)	3.40×3.70 35	12.58	東壁南寄	抜石、壁石 45	南東隅に長方型のピット(貯蔵穴か)。51×21、深さ不明。カマド左袖石は凝灰質砂岩。住居内に凝灰質砂岩・安山岩が散乱。	60→61→63
62	不整方形 N32°E(東)	3.00×3.25 24	8.78	東壁南寄	20		
63	長方形 N10°W(西)	3.88×2.32 36	9.00	東壁南寄か	? ?	北壁東側を中心に多量の焼石散乱(安山岩・凝灰質砂岩)。南東隅に焼土の分布。	61→63
64	長方形 N89°E(北)	3.40×6.02 13.8	18.06	東壁中央	抜石 45	西壁が張り出しのようになっている。住居内に安山岩の散乱。	
65	長方形 N7°E(西)	2.55×3.10 25	7.91	東壁南寄	抜石 50	抜石は凝灰質砂岩。カマド前付近に凝灰質砂岩の散乱。	
66	長方形 N14°E(西)	3.00×3.55 30	10.65	東壁南端	抜石、壁石、支石、架構材、52	カマド使用石は支石を除き、凝灰質砂岩切石。架構材は長さ54cm。	
67	? ?	? 20	?	東壁	30	カマド跡のみ残存。カマド前床面に凝灰質砂岩片。	

No.	形状 走方向	規模(m) (東西×南北) 壁高(cm)	床面積 (m²)	かまど 位置	かまど つくり巾(cm)	内部施設等 (数字の単位はcm)	重複関係
68	長方形 N 7° E(東)	2.80×3.40 20	9.52	東壁南端	55	カマド前中心に焼石散乱。	
69	長方形 N31° E(西)	2.90×3.10～ 26	8.99～	東壁南端	約30	住居の北半はH－85により破壊。	68→80・85
70	長方形 N 8° E(東)	2.90×2.60 15	7.54	東壁南端	壁石 約40		
71	長方形? N 3° E(西)	1.50×3.70 20	5.55～	?	? ?	東側$\frac{1}{3}$程度を残し、ピット4・5により破壊されている。	74→ピット4・5
72	長方形 N97° E(北)	2.85×2.80 15	7.98	東壁南寄	壁石、支石 45	壁石と支石は凝灰質砂岩切石。カマドは東壁南端に近い。南西部分をピット7により破壊。規模の南北長は推定。	72→ピット7
73	長方形 N 9° E(西)	2.80×2.20 15	6.16	東壁南寄	? ?	カマド及び東壁はピット6により破壊。北壁付近は撹乱。規模は推定。	75→73→ピット6・7
74	長方形? ?	2.90×1.00～ 17	2.90～	東壁南端	袖石 45	南壁を残し、大部分をH－75により破壊。	71→74→75・ピット3・5
75	長方形 N12° E(西)	2.95×2.00 12	5.90	東壁南端	42	大部分をH－73により破壊。	74→75→73
76	? ?	? ?	?	?	? ?	ピット10北東隅南寄りに焼土範囲のみ確認。カマド跡か。	不明
77	長方形 N 2° W(東)	2.80×4.00 30	10.80	東壁南端	58	南西隅に円型ピット。50×48、深さ44。	
78	方形 N 1° W(西)	2.80×2.80 19	7.84	東壁南端	袖石、支石、 架構材、約30	南西隅に円型ピット。68×52、深さ19。袖石、支石、架構材は凝灰質砂岩。南北規模は推定。	79→78
79	長方形 N 6° W(西)	2.85×3.35 11	9.55	東壁南端?	? ?	南西隅に方型のピット。75×56、深さ30。ピット内に方約20cmの安山岩。南東隅付近はH－78により破壊。	79→78
80	長方形? ?	2.00×1.30 14	2.60	東壁南端	? ?	床面に多量の安山岩の散乱。北半分はH－85により破壊。	69→80→85
81	長方形? N (西)	2.70×2.70～ 31	7.29～	東壁南寄	? ?	東半分はH－85により破壊。北側は、谷状の低地に削りとられている。東西規模は推定。	81→85
82	長方形 N 5° W(西)	2.30×2.80 32	6.44	東壁南寄	袖石 約45	南東隅に長円型の貯蔵穴。80×40、深さ22。同付近に凝灰質砂岩。袖石は凝灰質砂岩。	83→82
83	長方形 N40° W(西)	4.00×4.40 20	17.60	東壁南寄	架構材(?) ?	南東隅から西へ100の所に、口縁部を開き狭窄。南壁は溝状6により破壊。南北規模は推定。架構材(?)は凝灰質砂岩。	83→82
84	長方形? ?	4.30×4.50 30	19.35	?	? ?	南壁ぞいに床面下のピット。長軸245、深さ30。北壁を除き他は確認できなかった。規模は推定。	84→86
85	不整方形 N109° E(南)	3.30×2.90～ 36	9.57～	東壁南端	袖石 40	南西隅付近に石塊の散乱。北側は谷状の低地に削り取られている。	80→85 81→85
86	不整立形 N103° E(北)	3.50×5.00 30	15.75	東壁北寄?	? ?	東壁北寄りに凝灰質砂岩を含む石塊の集石ケ所あり。カマド跡か。南東隅に貯蔵穴状の凹み。165×80、深さ22。	84→86
87	長方形 N 4° E(西)	3.00×2.00～ 不明	6.00～ 9.00	東壁	? ?	北壁と西壁の一部を残すが、東壁・南壁や範囲は不明。カマド跡も焼土のみ残存。	不明

○壁長は最大値を計測　○床面積は壁の下端で計算　○壁高は遺構確認面からのもので、最大値を計測　○カマドの巾は袖部の内径。
○表中の石で特にことわりのないものは安山岩山石。

(3). ピット

ピットと名銘したものは15基検出された。覆土からみて、竪穴住居跡と同時代のものと、B軽石降下後のものの2種類にわけられる。前者は、更に、竪穴住居状の形態・規模を有するもの（No.1・2）と、長軸が2.50～4.50m短軸0.80～1.50mの細長い形態のもの（No.(12)・13～15）の2種類があり、機能的な違いも想像される。後者は、形態・規模ともに竪穴住居跡に近いものであり、この付近からは、中世の土器（常滑様の甕・カワラケ・鉢形土器――図版2、16～18）が出土した。

(4) 溝状遺構

溝状遺構は6条検出された。覆土からみて竪穴住居跡と同じ時期のもの（No.2～5）、B軽石降下後のもの（No.1）、耕作土で埋めているもの（No.6）の3種類が認められた。水の流れた形跡のあるものはNo.4のみで、他にはない。No.3とNo.5は、90cm離れているが東西に一直線をなし、覆土中からは多量の土器片や石塊が出土するなど、同じ性格のものと思われた。

(5). 井戸跡

井戸跡は、調査区域の真中東寄りの所に一基検出された。平面形は円形で、円柱状を呈してい

る。直径は検出面で1.10m、85cm下で78cmである。更に1m以上下へ続くことが確認されているが、完掘できなかった。覆土はB軽石を含む黒かっ色砂質土である。出土遺物はなかった。東側をピット13と切り合っているが、覆土からみて本遺構の方が新しい。

井戸跡に接して、南東に竪穴住居状のピットが群在している。覆土からみて、ほぼ同時期のものと思われるが、平行した時期に存在したかどうかは不明である。

(6) 集石遺構

溝状遺構1の東端に接して検出された。遺構は検出面で4.00×3.50m、深さ50cmの掘り形の底部に安山岩の亜角礫が集石されている。掘り形の底部は約1.90×1.90mの不整方形である。斜面は南辺を除き、途中に巾20～70cmのテラス状の段を有し、この北辺と東辺の内側に石が一列に並べられている。更にこの内側の掘り形底部に石が乱雑に集石されているのである。安山岩は60×50cm～10×10cmまでさまざまである。覆土は耕作土が中心で、地層断面をみると所々に地山層のブロックが帯状に入り、意図的な埋てんを思わせた。遺物は土師器や須恵器が覆土中から小量出土したが、遺構と直接結びつくものは認められなかった。北壁の走向はN58°Eである。覆土からみて、近世以降のものとみられる。

4．遺　物

(1). 概　要

遺物は、遺物整理箱にして約50箱分出土した。その大半は竪穴住居跡に伴なうものであった。主なものに土師・須恵器の他に、灰釉・緑釉陶器・文字をヘラ書きした碗・瓦・硯・古銭（判読不明）・鉄製品・紡錘車等がある。また、同じ時期のピットからは白釉陶器が出土した。B軽石降下後に築造されたとみられるピット3～11付近では、常滑様の甕やカワラケ、あるいは注ぎ口のある鉢形の土器が出土した。表採では、縄文式土器・石器や二彩（小片なので三彩の可能性もある）が発見された。

(2). 竪穴住居跡

竪穴住居跡からは、遺物相からみると真間期の終わりないし国分期初期から国分期の終末まで継続しており、器種・器形ともに変化に富んだ遺物が出土した。未だ整理の途中であるが、気づいたことをいくつかあげると次のとおりである。

1．埋土中から石塊とともに多量の遺物が出土し、意図的廃棄をうかがわせるものがあり注目された（H－13・83。他に溝状遺構3・5）。

2．硯（風字硯2・円面硯1）・二彩・緑釉陶器・瓦（丸瓦・平瓦）・帯金具状の鉄製品（巡方？）等が出土しており、本遺跡の性格の一端を示すものとみられる。

3．報告例のない器種として、羽釜ないし土釜状の形態を有する底部穿孔土器が出土した。

4．遺物は器種・器形ともに変化に富んでおり、真間期の終末から国分期の終末まで、十分編年可能である。

個々の住居跡の遺物については表2のとおりである。

(3). ピット

竪穴住居跡と同時代とみられるピットからは白釉陶器が出土している（No.1・15　図版2－8・9）。また、覆土中から多量の石塊と土師器等が出土し、意図的廃棄を窺わせるものがあった（No.15）。これらのピットは出土遺物からみて、羽釜出現以前に構築されたものと思われる。B軽石降下後のピット内、あるいはその周辺から、小量ながら常滑様の甕・カワラケ・注ぎ口のある鉢形

第2表　竪穴住居跡出土遺物一覧表

	土師器											須恵器									灰釉陶器					緑釉	鉄関係			その他	備考
	長頸カメ	コの字カメ	小型カメ	羽釜	上釜	坏	埦	広台埦	皿	高台皿	その他	壺・鉢	羽釜	坏	蓋	埦	広台埦	皿	高台皿	その他	瓶	埦	皿	段皿	その他	釉	製品	鉄滓	砥石		
1		(1)				1	○1					2		2					1								※1	1	1		※墨面に3ヶの鉄のある長方形の金具。第5図28
2				(1)	(1)					(1)	※2																				※底部穿孔の土器(羽釜型？)
3				7以上			△1					(2)以上	1	3	1		4以上											1			
4		(1)				△1									1		1														第2図1～4
5			1			△1						(2)			2		3									1※(不明)					※覆土中出土。
6				1		△1		3				(1)				2	2												1		
7				4		2		1				1	2	1		2	3		1	1(体？)											第2図5～15
8				(1)			△1					(2)		2			1		1			1									
9				2	(2)		○1		※※1		※2	(3)		2			1					1									※羽釜と同形態の底部穿孔土器。第2図16～18 ※※カワラケ様
10		(1)以上		2以上		1														1(段皿)										※1(初鋳造)	※図版2－15
11				5	1			1							1																
12				2以上		1																							1(すえ紙)		
13	4	3				10以上						(4)以上		※×29以上	2		13以上												1		意図的破壊とみられる埋土中遺物含む。須恵ヘラ切り込2。第3図1～17※底部内外面に糸切り痕を残すものあり。図版2－13
14				2			※4	3	※1	※4																					※カワラケ様の土師。第3図18～32
15				(1)	2以上		(2)以上																								
16				4以上	(4)以上		△(1)	3				3以上			2							2	1	:							
17									※3														1								埋土中に羽釜、土釜、皿(カワラケ様)。 ※カワラケ様の土師器。
18				(1)	(1)							(3)																			
19	(1)		1			2以上						(4)			1	2	×4														土師器小型カメは、小鉢の可能性あり。ヘラ切りの須恵高台埦は1。
20				(1)									1																		
21			1(脚付)									(1)	(3)以上	4以上			1													※1(風字硯)	※第5図22　図版2－1
22								1					1																		埋土中から、カワラケ様の高台皿出土。

	土師器											須恵器									灰釉陶器					緑釉	鉄関係			その他	備考
	長胴カメ	コの字カメ	小型カメ	羽釜	土釜	不	埦	高台埦	皿	高台皿	その他	壺・甕	羽釜	坏	蓋	埦	高台埦	皿	高台皿	その他	瓶	埦	皿	段皿	その他	釉	製品	鉄滓	砥石		
23				2以上	1			1				4				1	3					1							2		土釜は「コ」の字カメと土釜の中間的な印象。
24				2									1	1												1※(不明)	1(鍵)				※覆土中
25				(1)				2				(2)以上	(1)	2			6										※1				※鉄製品は薄い円盤形。7cm×6cm、厚さ0.2cm。
26	(2)以上					7以上						(3)以上		10×以上	3以上		3														
27				2		1							1	×5	1		×2			1											26号住居跡の遺物との間に混乱がみられる。
28				2以上									1	×1			1														
29	1											(1)			1																
30		(1)以上	1(脚付)			3以上	(2)○以上					(3)以上		3以上			7以上		2				※2						1		
31				(2)以上	1	1	(1)					(1)	(1)									1以上									
32				(1)以上									(1)	2			2							2							※灰釉陶器段皿のうち、1は3脚。 第5図26　図版2－10
33				(1)									(1)																		
34																															床面付近の出た遺物なし。
35				(1)																		1							1		床面、埋土中とも遺物の出土なし
36				3以上	1			※1	※1			(1)										1									※カワラケ様の土師器。
37				(1)			△2														(1)								1		
38		(1)				1						(1)															1(鏃)				埋土中遺物としてカワラケ様皿、埴計8個体分。
39				(3)	2	1		1				(1)					1										2(釘)				
40																															床面、埋土中とも遺物の出土なし。
41				3以上					※1	1	1(鍋?)										(2)										※カワラケ様の土師器。
42				6以上			(1)					1	3				2					1	2				1(石臼)		1		第4図1～14
43				(2)以上				2	※1			(3)以上	(1)	2			2			※※2	(1)	1	3以上			1(埴)					※カワラケ様の土師器。 ※※耳皿他
44				(1)								(1)	(1)																		埋土中に土師器高台皿(内黒)
45																															床面、埋土中とも遺物の出土なし。

	土師器											須恵器									灰釉陶器					緑釉	鉄関係			その他	備考
	長胴カメ	コの字カメ	小型カメ	羽釜	土釜	坏	埦	高台埦	皿	高台皿	その他	甕・壺	羽釜	坏	蓋	埦	高台埦	皿	高台皿	その他	瓶	埦	皿	段皿	その他	釉	製品	鉄滓	砥石		
46						△1						2				1	1														
47		(2)以上												2以上			1														
48																															床面・埋土中とも遺物の出土なし。
49		1				1	10以上																								
50																															住居跡の実面、範囲等を確定できず。
51		(2)				△1						(1)				1	5														古墳内の内置施設にヘラ磨き。「河上」 第4図15～21、第5図25　図版2－4
52				(1)													2														埋土中に糸切り未調整の土師坏。
53				3以上										1																	
54				6	3				※1		※※2																				※カワラケ様の土師器。 ※※土釜と河形態の底部穿孔土器他。第5図1～7
55				(5)						1(大型)												1									
56					(2)		※1							1			2													※※(底平底)	※カワラケ様の土師器　※※第5図23　図版2－3
57								1						1																	
58		(1)		1				1						2以上			1										※1(ハケ)	1			※第5図27
59		(1)		(2)以上	(1)	1	2	1					(2)以上	2以上			1				1		2						1		
60				(1)			1																							※1(古墳)	※図版2－14
61				(1)								(2)		1			3			(1)(瓶)											
62				(2)以上	(1)		(1)							1			1						1								
63				(1)								(1)	(1)									1									
64						1								2			1														
65		4以上	1(脚付)									(1)		4以上			3														
66				3	1			○1																							土師器高台埦は内黒で、内外面ともヘラ磨き。
67																															床面上遺物なし。
68				(2)																											

	土師器											須恵器									灰釉陶器					緑釉	鉄関係			その他	備考
	長胴ガメ	コの字カメ	小型カメ	羽釜	二釜	坏	埦	高台埦	皿	高台皿	その他	壺類	羽釜	坏	蓋	埦	高台埦	皿	高台皿	その他	瓶	埦	皿	段皿	その他	釉	製品	鉄滓	砥石		
69									来1																						※カワラケ様の土師器
70					(1)																										
71						2		1						1															1		
72				(1)							来1	(1)										1									※底部穿孔土器。つくり、形状からみて羽釜と同形態になると思われる。
73				4以上																											
74				(1)		(1)							(1)																		
75				(2)以上																			1								
76				1	(1)										1																
77				(1)以上			△1																								
78			1	(1)				1									1												来1(平瓦)	須恵高台埦は底部内面にヘラ状線で「冊」の印。平瓦に焼土塊付着。※図版2-11
79				(3)以上																									来1(丸瓦)	※図版2-12
80				(1)					来1																						※カワラケ様の土師器
81				(4)	(2)					(1)																					
82				(4)以上		△(5)				1		(3)以上	3	2			1					1	1								
83	7以上					7以上	△1	1				2		×14	4		2			1(高台部)									1(円面硯)	蓋のうち1にカエリあり。意図的廃棄と推定される埋土中遺物を含む。第5区8～21・24　図版2-2
84		(1)															1			1											
85				(4)			△1		△1			1																			土師器埦・皿はカワラケ様に似る。
86		5以上	1(東台)			1						(1)		7以上			5		1												
87		(1)	1(鍋?)				○(1)					(2)以上		4以上	1		5		2												

遺物の数は原則として、床面密着又は床面に近接しているものの個数である。

(　　)は器形を推定したもの。

○　は内黒土器。

×　は須恵器坏・椀で底部の回転ヘラ切り痕、又は回転ヘラ調整の認められるもの。他はすべて糸切り未調整。

△　は、土師器の坏、埦で、底部の糸切り未調整又はロクロ整形と認められるもの。

(不明)は器形の不明なもの。

の土器が出土した（図版２－16～18）。

(4). 溝状遺構

最も多量の遺物が出土したのはM.3とM.5であり、一緒に多量の石塊（凝灰質砂岩切石を含む）が出土した。いずれも覆土中であるが、意図的な廃棄を思わせた。このことは、水の流れた形跡のないことをも考え合わせて、性格の一端を窺わせるものである。主な遺物に土師器（長胴甕・「コ」の字口縁甕・羽釜・坏・椀等）・須恵器（壺・甕・底部ヘラ切りの坏・蓋・椀・皿等）・灰釉陶器（瓶）などがみられる。機能を果たしていた時期の上限は真間期終末～国分期初期、下限は羽釜使用期と推定される。

M.4からは須恵器の甕片が出土したが、時期等は不明である。

B群石降下後に構築されたとみられるM.1からは、前の時代の竪穴住居跡で使用されたと思われる土師・須恵器が出土しただけである。M.6からの出土遺物はなかった。

(5). その他の遺物

井戸跡からの出土遺物はなかった。また、集石遺構の覆土である耕作土中からは土師器や須恵器が出土したが、遺構との直接的な関連は認められなかった。表採では、後期の縄文式土器や石器が発見されたが、関連する遺構は確認されなかった。二彩小片（図版２－５）の発見も表採ではあるが特筆されよう。

II. 結　語

今回の調査により、本遺跡は奈良・平安時代から近世以降に至る複合遺跡であることが判明した。ここでは、竪穴住居跡とピットを中心に扱うことにする。本遺跡の中心は、土師器を伴う87戸の竪穴住居跡と同時代の他の遺構である。これに関連する土師・須恵器を除く主な遺物として鉛釉陶器（二彩・小片なので二彩の可能性もある。表採（緑釉・白釉）・硯（風字硯２・円面硯１）・カマド使用の瓦（丸瓦・平瓦）・帯金具状の鉄製品（巡方？）等がある。これらを必要とした理由と、その供給源に思いをめぐらす時、これらが本遺跡の性格の一端を現わしているものと考えられる。

ところで、前橋市教育委員会では、中島遺跡の周辺で、土地改良に伴う発掘調査を３次にわたり実施している。中島遺跡同様に主な遺物を拾い出し、比較してみよう。

第１次調査[注1]（本遺跡の北約30m。9,320m²。竪穴住居跡28戸）

鉛釉陶器（二彩・緑釉）・硯（風字硯１、高台部転用硯１）・巡方・カマド使用の瓦（丸瓦）・多量の鉄滓と羽口

第２次調査[注2]（本遺跡の東約300m。5,000m²。竪穴住居跡23戸）

鉛釉陶器（緑釉）・石帯（巡方）・瓦・るつぼ（４個体分）と鉄滓・鋳型（？）

第３次調査[注3]（本遺跡の西200mと東600m。11,000m²。竪穴住居跡45戸）

丸鞆（裏座）・カマド使用の瓦

上記の遺物は中島遺跡のものと非常に似かよっており、竪穴住居跡の存続時期もほぼ同じである。更に細かな検討が必要であろうが、ここでは、本遺跡の性格が、周囲の遺跡地を含め、更にその上で一まわり大きい歴史的環境の中に置いて考察する必要があろうことを指摘したい。

次に煮沸用具の変遷をみることにする。これは煮沸用具どうしの共伴関係から、下記の順序に出現することはほぼ確実である。これに各煮沸用具が全体に占める割合と、前述した主な遺物を付記してみよう。

煮沸用具の変遷	長胴甕→「コ」の字口縁甕		→ 羽釜（須恵含）→土釜		備考
全体に占める割合	4.6%	13.8%	31.3%	20.7%	29.6%は煮沸用具の出土なし。他の器種からみた推定では羽釜十土釜は70%以上になる。
共伴する主な遺物	円面硯	帯金具状の鉄製品・ヘラ書きの土器『河上』・灰釉陶器	風字硯・瓦・段皿・紡錘車	底部穿孔土器・耳皿	
	（二彩）		灰釉陶器・緑釉・（風字硯）		

上表のような変化は、各々の煮沸用具をさらに細分化し、他の器種とその器形変化を組み合わせるならば十分編年可能であり、それぞれの使用時期もある程度推測可能であろう。ここでは、本遺跡が羽釜使用期になって集落が膨張して、土釜使用期までその傾向が続いたことを確認し、前述した本遺跡の性格が、最初の長胴甕の時代から最後まで一貫して続いた可能性を指摘するにとどめたい。

次に第II層を覆土とするピット（No.3～11）について述べることにする。これは、ピット8・9・11を除くと、土師器を伴う竪穴住居跡からカマドを取り去った形に類似し、規模および掘り込みの深さもほぼ同じである。このピットの周辺からは、常滑様の甕・カワラケ・注ぎ口のある鉢状の土器が出土している。また、すぐ北に接して、覆土を同じにする井戸跡が検出されている。これらはいずれもセットとしてとらえたい所だが、同時に存在したかどうか確証はない。いずれにしても、土師器を伴う竪穴住居跡が消滅した後の生活の痕跡が極めて少ない現状だけに、貴重な資料と言えよう。なお、溝状遺構1も上記のピットと覆土を同じにし、北壁ないし北辺の方位をほぼ同じにとり、何らかの形で関連のある遺構ともみられる。

最後に、竪穴住居跡に使用されている凝灰質砂岩の供給源の問題について触れてみたい。カマドに石の利用が認められるものは87戸中41戸（推定を含む）で、そのうち何らかの形で凝灰質砂岩の使用が認められるのは35戸である。これは石利用のカマド全体の85%になり、石組カマド構築の際に凝灰質砂岩が必需品であったことがわかる。この石は、原石のままでは極めてもろい性質のもので火を受けることにより硬化する性質を有するため転石等の自然の形で存在することは不可能であり、どこからか切石として供給されたものと考えられる。

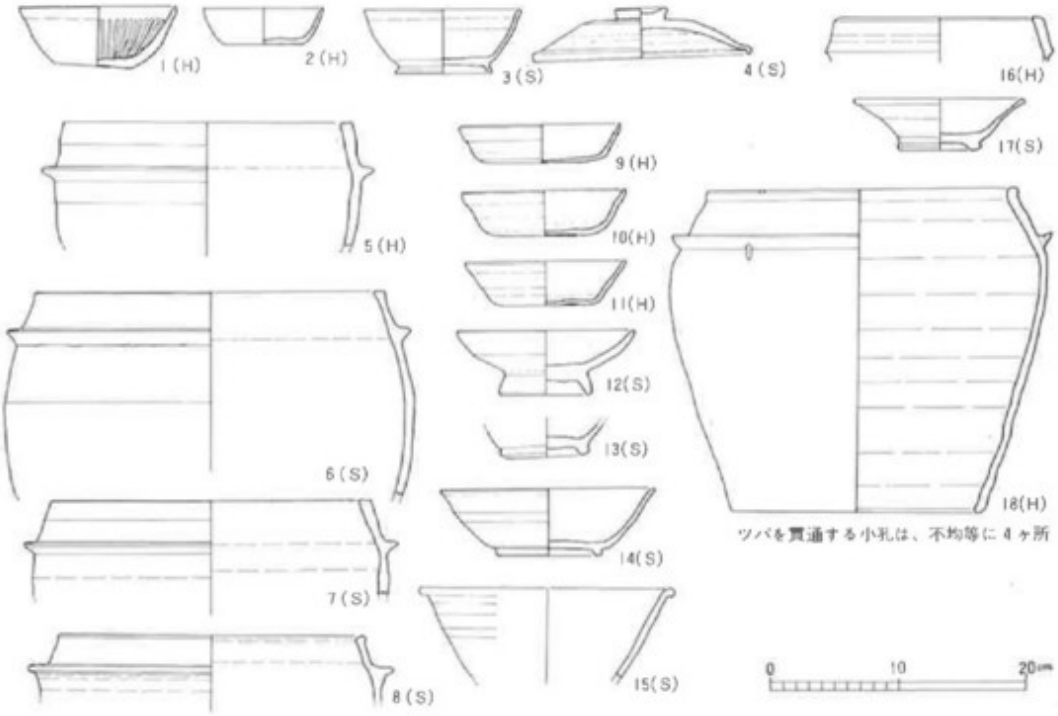
本遺跡地の西限は、八幡川に刻まれた前橋台地の露山崖（比高5m前後）で画されている。この崖の層序の中に、砂礫を混ぜるシルト性の層がみられ、本住居跡使用のカマド石の凝灰質砂岩との類似性に注目していた。そこで、群馬大学教授新井房夫氏に鑑定を依頼した所、同じものの可能性もあるとのことであった。今後、前橋台地の露山崖付近又本遺跡の近くの露山崖や住居跡近くの地山から、凝灰質砂岩の石切り場が検出される可能性も出てきた。

本調査にあたり御協力・御指導いただいた関係各位、特に厳寒の中を直接調査に従事した発掘作業員の方々に心から感謝の意を表するしだいである。

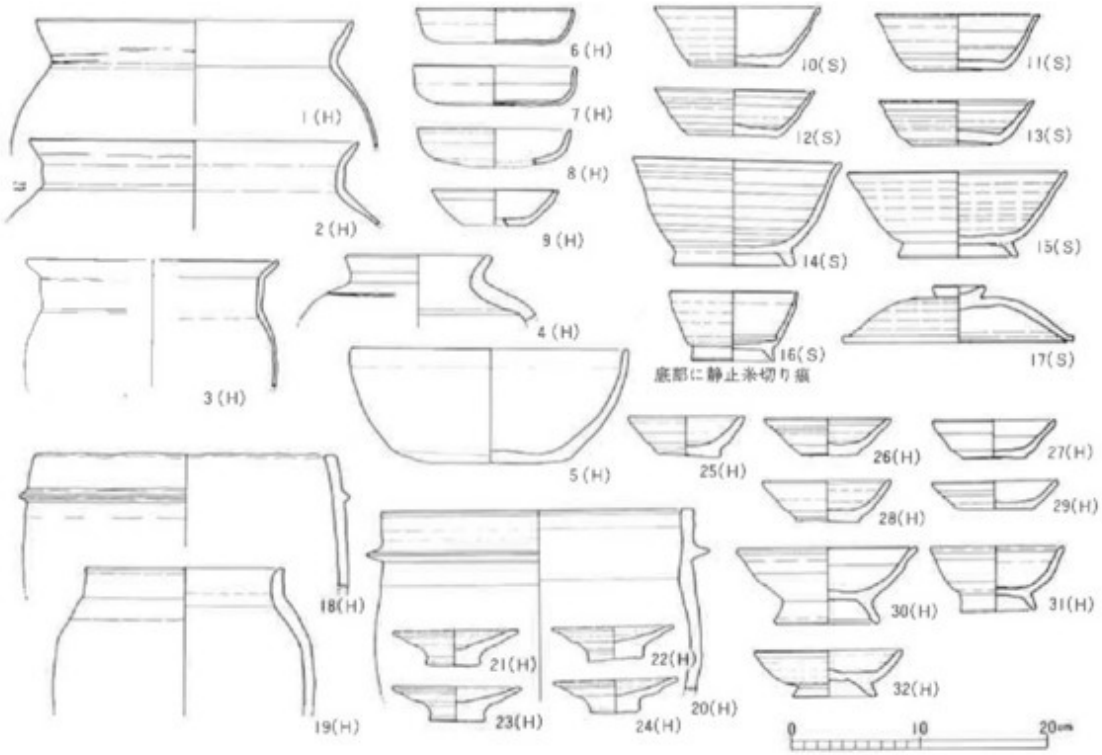
（注1）前橋市教育委員会　1980　『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』

（注2）報告書未刊（本書P.19参照）

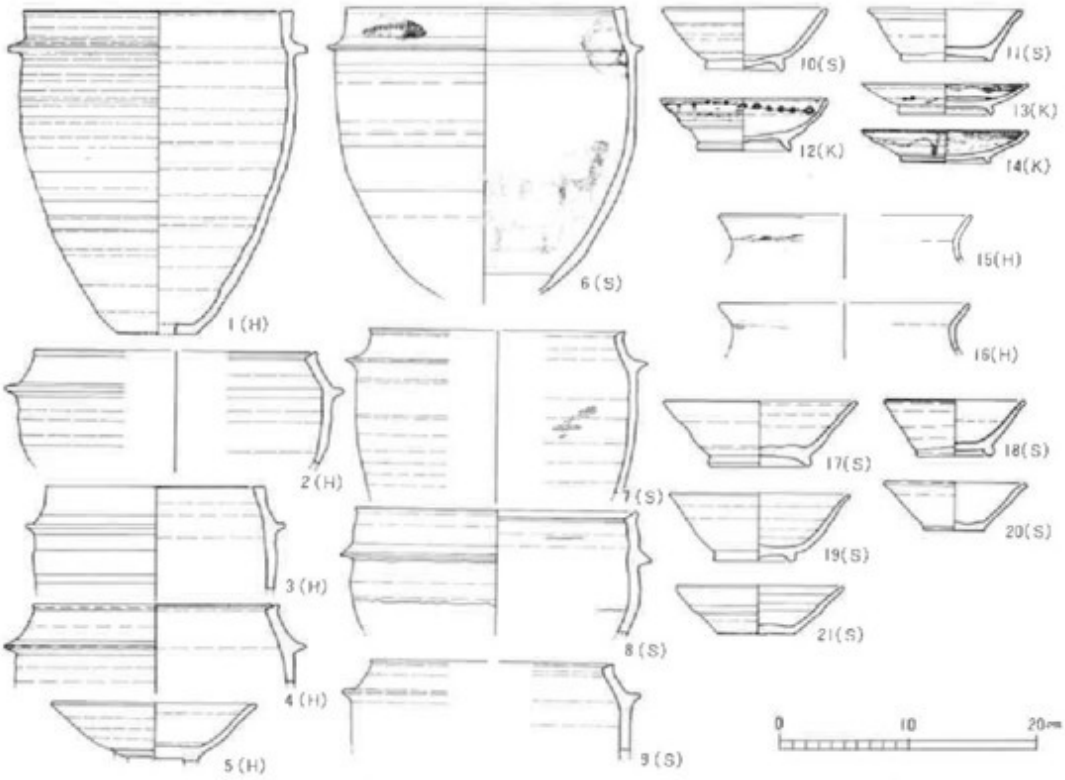
（注3）前橋市教育委員会　1981　『清里南部遺跡群（III）』



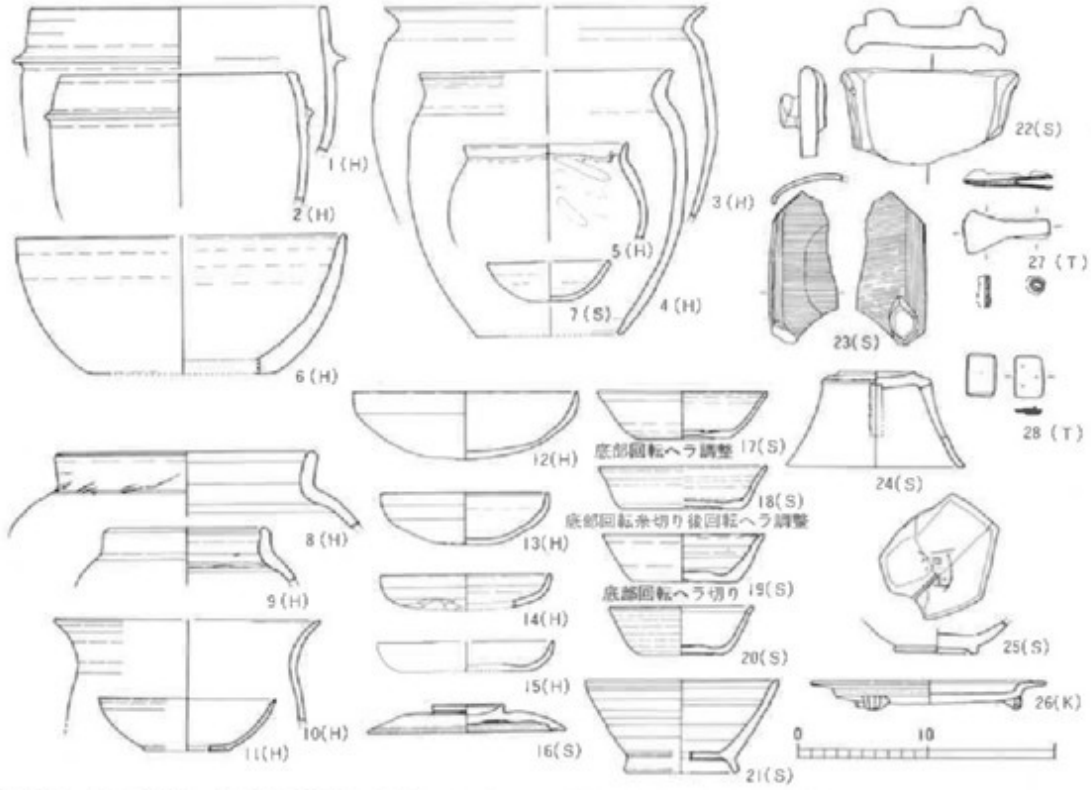
第2図(4号住1～4、7号住5～15、9号住16～18)　H→土師器　S→須恵器



第3図(13号住1～17、14号住18～32)　H→土師器　S→須恵器



第4図(42号住1～14、51号住15～21)　H→土師器　S→須恵器　K→灰釉陶器



第5図(54図号住1～7、83号住8～21・24、21号住22、56号住23、51号住25、32号住26、58号住27、1号住28)　H→土師器　S→須恵器　K→灰釉陶器　T→鉄製品

図版 1

遺跡地遠景(八幡川の対岸から)

ピット 3 ～ 14、H-62・70～77、84・86付近(東から)

溝 2 ～ 6(南西から)

遺跡全体(北から)

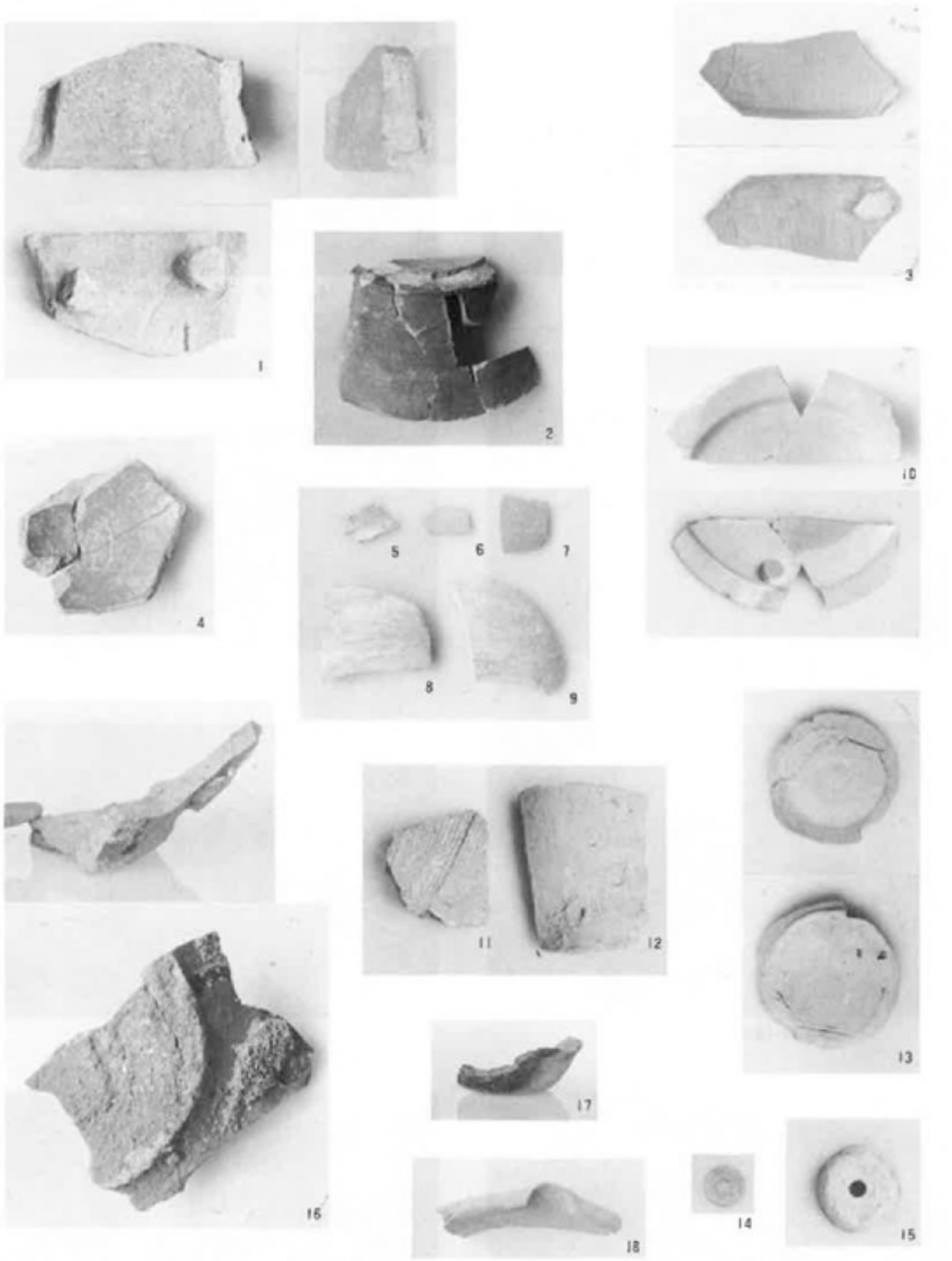
H-16カマド跡

H-26カマド跡

H-13遺物出土状態(全体)

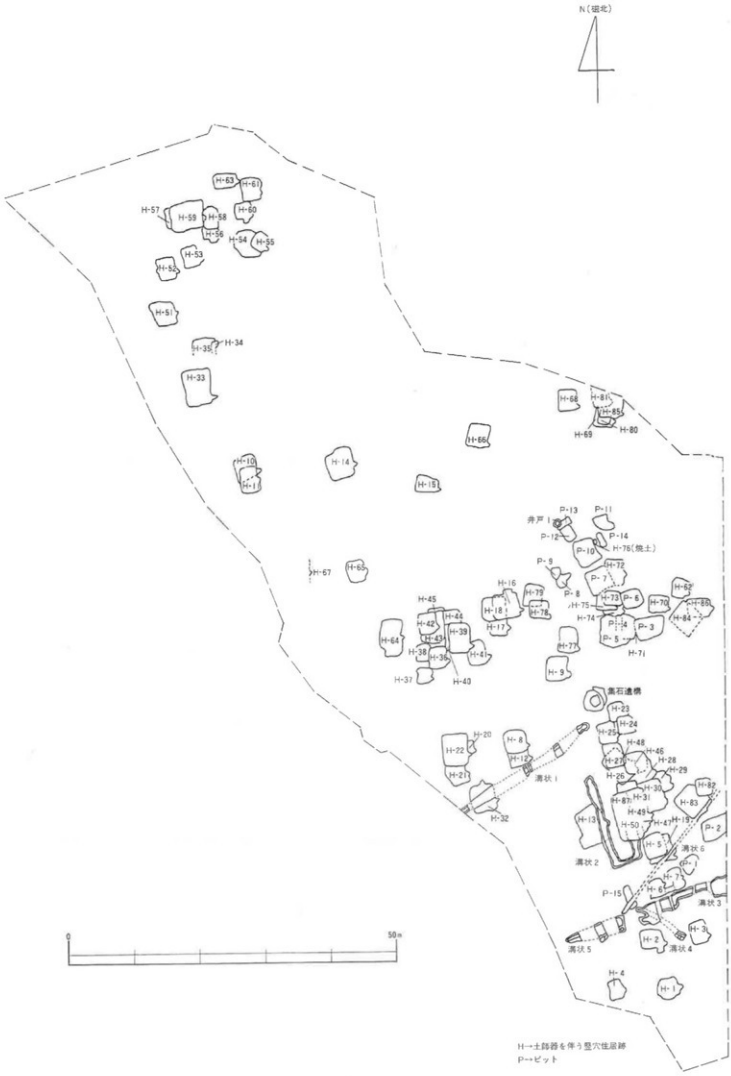
H-13遺物出土状態(細部)

図版 2



1．H-21　6．H-24覆土中　11．H-78　16．ピット3～11付近
2．H-83　7．H-5　〃　12．H-79　17．　〃
3．H-56　8．ピット15　13．H-13　18．　〃
4．H-51　9．ピット1　14．H-60
5．表採　10．H-32　15．H-10

0　5　10　15cm


N(磁北)
H-63
H-61
H-57
H-59
H-58
H-60
H-56
H-54
H-55
H-53
H-52
H-51
H-35
H-34
H-33
H-68
H-81
H-85
H-69
H-80
H-66
H-10
H-11
H-14
H-15
井戸1
P-13
P-11
P-12
P-14
P-10
H-76(焼土)
P-9
H-72
P-7
H-67
H-65
H-16
H-79
P-8
H-75
H-73
P-6
H-70
H-62
H-88
H-45
H-44
H-18
H-78
H-74
H-84
H-42
H-17
P-14
P-3
H-64
H-43
H-39
P-5
H-38
H-36
H-41
H-77
H-71
H-37
H-40
H-9
集石遺構
H-23
H-24
H-20
H-8
H-12
H-48
H-46
H-22
H-25
H-28
H-29
H-21
溝状1
H-26
H-30
H-87
H-31
H-83
H-32
H-49
H-13
H-50
H-47
H-15
P-2
H-51
溝状6
溝状2
H-7
P-15
H-6
溝状3
0
50m
溝状5
H-2
溝状4
H-3
H-4
H-1
H→土師器を伴う竪穴住居跡
P→ピット

附　清里南部遺跡群IIの遺物について

清里南部遺跡群IIは、土地改良事業に伴う事前発掘調査として、昭和55年２月１日から同年３月10日にかけて実施したものである。道水路部分と水田転換地部分を対象に、その合計面積は約5.000㎡であった。

検出された主な遺構は、土師器を伴う竪穴住居跡（23戸）・溝跡・ピット等であった。いまだこれらの遺構とそれに伴う遺物は未整理の状態にあり、詳細は不明だが、竪穴住居跡は国分期が大部分、溝跡は国分期から中世にかけて、ピットは国分期のものを含むとみられる。

ここでは、伴出遺物および出土状況等については省略せざるを得ないが、遺跡の性格を物語ると思われる遺物の一部を紹介することにする。（なお、下の写真のもの以外に石帯（巡方）も出土した。）

1．2．3．ろつぼ　　7．鋳型？
4．5．6．緑釉陶器　　8．9．10．瓦

0　5　10cm

社会教育課

中島遺跡発掘調査概報

昭和56年3月25日　印刷
昭和56年3月31日　発行

発行　前橋市教育委員会

印刷　上毎印刷株式会社

1-10
201
8